廣き物を狹く折約むるを、多々牟と云も、折れば重なる故なり、然れば疊は、上代には必幾重も重ね敷たる物なり、萬葉十一に、疊薦隔編數、十二にも疊薦重編敷とある、此レは薦を幾重も重れ編て、一ッの疊に造るを云り、こはやゝ後の事にて、かの上代の如く、幾重も敷べきを、便りよく一ッに編重れて、厚く造り成せる物なるべし、上代の疊は、後世の如く厚き物とは見えず、

〔嬉遊笑覽一上居處〕同傳（古事記傳二十八）疊むとは重ぬることにて、菰を重ねて幾重もある意、又石だゝみ、子だゝみ、藪だゝみ等あり、たゝみの義是なり、然るを今のうすべりのやうに心得るは非なり、むしろ一重なりとも、捲こそせめ、折たゝみなば、折めつきて用ふべからず、かぞふるには、一ひら二枚といひたり、幾帖といふはさらなり、又いづこにもあれ、たゝみ一枚二枚ばかり敷て用る事もあり、

〔倭訓栞中編十三多〕たゝみ　神代紀に席薦をよめり、たゝむを體にいふ詞なり、帖もよめり、蘭筵をもよめり、延喜式に折薦帖あり、又大疊、小疊、長疊、短疊、重疊などいへり、八重疊へぐりの山など屬ければ、古へのたゝみは、今云薄緣の類なるべし、古事記に以菅疊八重、皮疊八重、絹疊八重、敷波上とも見えたり、緣は帝王院は繧繝緣也、親王大臣は大紋高麗緣也、公卿は小紋高麗緣也、四五位雲客は紫緣、六位侍黃緣也と海人藻芥に見えたり、今のたゝみは、中山傳信錄に、席を以て草を包み、厚さ一寸ばかり、緣に青布以てぬうといふにて知ぬべし、いつの比よりか始りけん、西土にはなきもの也、東涯も中國古者席地而坐、後世施床椅而處、用磚鋪地といへり、

〔嬉遊笑覽一上居處〕次でに云、疊とは數合するもの故に名付、重ぬるにて折ることにあらず、今物をたゝむと云も重ぬるなり、古書に、たゝみめといふは、水草のわかめを集めて作りたるに、今の干海苔の類、今たゝみいわしといふ物と同義なり、

〔柳亭記上〕疊　障子

昔疊といひしは、今の薄緣なり、源氏須磨へたゝせ給はんとし給ふ條に、疊ところ〴〵ひきかへ